

令和3年(2021年)秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・石崎大介・岡本晴夫

1. 目的

2021年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル：以下、バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2021年9月29日から11月15日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）の112定点（北湖75定点、南湖37定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは標準体長130mm未満を、ギルでは標準体長60mm未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では増加し、過去2番目 {775.7尾/ha（前年比189.1%）} の水準を記録した（図1）。一方、南湖では昨年から半減したものの、依然として高水準であった {1,184.8尾/ha（前年比53.4%）}。ギル当歳魚の生息密度はバスとは対照的に北湖、南湖とも低水準であった {北湖：301.4尾/ha（前年比43.5%）、南湖：606.5尾/ha（前年比207.1%）}（図2）。近年、バス当歳魚の生息状況が高水準である状況が続いており、その生息量がギルと同程度～逆転する傾向がみられている¹⁾。今後、いかにバスの生息量を抑制するか、その発生状況にも注目しながら検討する必要がある。

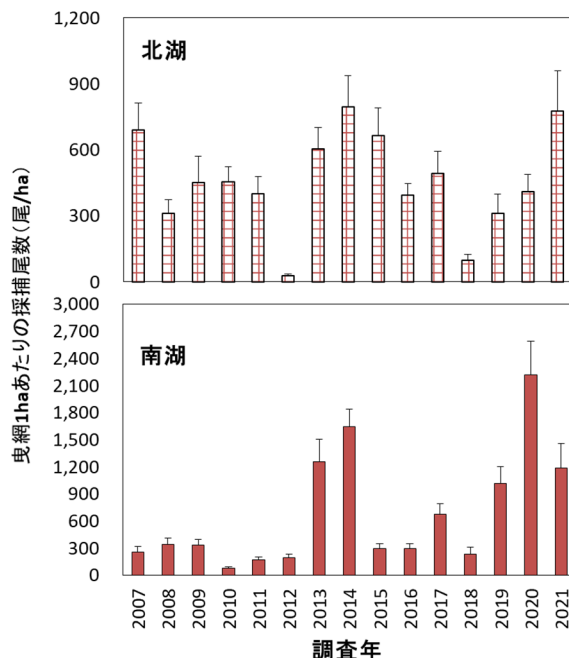


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

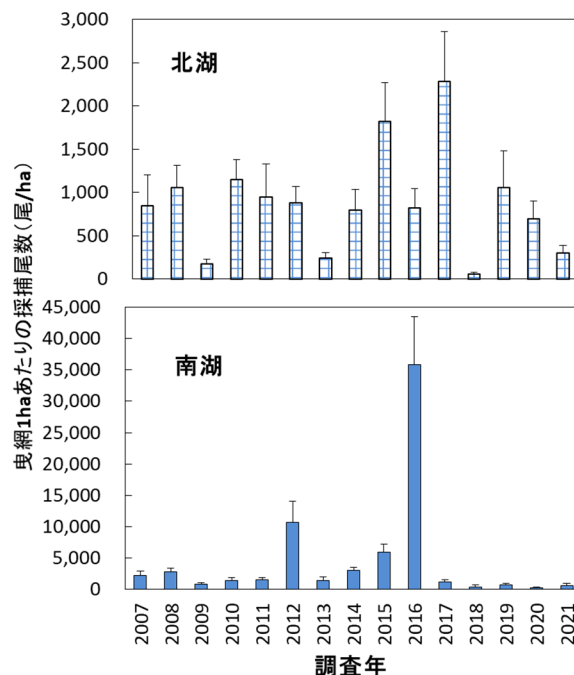


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

1) 田口 (2021). 令和2年度(2020年度)当初の琵琶湖における外来魚生息量の推定. 令和元年度滋賀県水産試験場事業報告, 67.